



郷土史

ていね

第 82 号 (特集号)
平成 26 年 10 月 8 日
手稲郷土史研究会会報

第 100 回定例会記念講演会 会長挨拶



本日は本間手稲区長さん、細野手稲区連協会長さんをはじめ、このように大勢の皆さんにお集まりいただきまして主催者として大変嬉しく思います。ありがとうございます。

昨年のごころ、手稲の文化財を護りたいという一心で、皆様方へ大変なご支援、身に余るご協賛を頂きました。お礼申し上げます。このあと講演の中で前田農場駐輦記碑移設記録のビデオを流したいと思います。

さて、本日の演題は、「100 回定例会」と銘打ちました。ここで、私たちの郷土史研究会の誕生からの歩みとこれからの進め方を簡単にお伝えしたいと思います。

平成 17 年の秋、丁度今ごろでした。私たちの住む町内会、連町、区連協の皆様強い後押しで誕生の運びとなったものです。この広い札幌の中で、手稲だけ郷土資料館が存在しない（公設・私設を問わず）。それでは「これからの手稲の子供たちに、この町の大事な歴史を伝えることができないのは非常に残念なことだ」ということで、資料館を建設する受け皿として、「区民の皆様が一生懸命歴史の勉強をしましょう」と、立ち上げていただいたのがこの研究会でございます。それから毎月一度、ここ区民センターの会議室をお借りして（当初は 6 時半から）今は 6 時 15 分から約 2 時間、区民センターが施錠されるまで歴史の勉強を重ねてきました。それが 100 回を迎えたという、いわば通過点でございます。

この会の在籍数は現在、六十数名、婦人の方も沢山いらっしゃるようになりました。私は 70 代で、立派な年寄りであり、高齢者と自覚しています。しかし、会の中に入りますと、言葉が悪いですけども、若造であり、鼻たれ小僧であります。私たちの先輩、80 代以上の方々いろいろな時代を生きて来て、私たちに伝えてくれています。最長老のかたは 90 代に入りました。

よく口にさせていただきます。「たった二千円の会費で、こんなに面白くて、ためになる研究会はない」と。涙がでるほど嬉しい言葉をいただきます。

いよいよ来年は、十年目、十周年に入ります。ここで、私どものこの会を益々充実させると同時に、最初の会の目的であります「資料館づく」の方に舵を切らせていただきたいと思います。とは言いましても、特別なことを考えているわけではございません。本当に子供からお年寄りまで、なにげなくやってきて、歴史談義をし、口幅ったいですが「地域にとって、手稲の町づくりに、こういう会があったらいいな」と言っていただけのような会を、皆様のお力を得ながら精一杯頑張って進めたいという気持であります。

私がここに大事に持ってきたこれは、会が創立した翌年、平成 18 年 3 月に、手稲地区の皆様によって作っていただきました「手稲郷土資料館設置趣意書」です。その中の一部を読ませていただいて終わりにさせていただきます。

「未来に向かって発展し続ける手稲に郷土資料館を！ 町は常に歴史を紡ぎながら歩むのです……」 詳しい文面は省略させていただきます。最後の文面です。「……何卒、手稲の地を愛する皆様のご賛同とご協力を頂きますようお願い申し上げます。」

この文面を大事にしながら、精一杯この会を続けていきたいと思っております。

「手稲前田の地名にもなった

加賀百万石前田家第15代当主が拓いた前田農場」

曙 茂内 義雄 氏

- 1 はじめに 手稲、軽川の地は
伝統と歴史の街 過去を知る 未来へ
- 2 前田農場 昭和17年前田の地名に
加賀百万石前田家の農場
昨年一年間前田家と交流
北海道開拓史上における前田家の位置付け
- 3 農場の終焉と手稲鉦山 今も残る手稲山に
手稲山も前田の山
国策に沿った金鉦山 三菱の鉦山に
札幌一中生が鉦山のダム作りに 今も残る丘
(小山田碩 民亮一)
- 4 当主利為侯悲運の死 昭和17年
長女酒井美意子が語る悲劇の将軍
恩義を伝える前田の人たち兼正寺で法要を
当会会員 第60期士官候補生がみた前田侯
(吉田寛義)
- 5 その他前田家の残したもの お宝です
軽川は道内外有数の酪農地帯に
平沢貞通画伯帝展入選作「春近し」は軽川原野
文学作品上にも
前田家から農場の歴史的資料をお借りして

【参考書】「知られざる手稲と加賀百万石～手稲前田
と前田農場～(駐輦記碑移設記念)」「前田
利為」「ある華族の昭和史」古新聞、戦前の
「北海タイムス」等

【前田農場略史】

- 明治15 15代当主前田利嗣侯、起業社を興す。
- 18 岩内郡に前田村できる。
 - 27 茨戸に前田農場創立。
 - 28 軽川支場できる。
 - 30 場主、農場を視察。
 - 33 利嗣侯死去。16代利為侯継ぐ。
 - 36 場主、農場を視察。
 - 39 軽川を本場、茨戸を支場とする。
 - 40 軽川富丘地の造林事業に着手する。
 - 43 木古内、知内に林業所開く。
 - 44 皇太子殿下、前田農場行啓。当主、陸軍大学校
卒業。
- 大正2 当主、ドイツ国に私費留學。
- 6 場主、農場視察。
 - 12 利為侯爵の長兄(時の逓信大臣)と実弟農場視
察。
- 昭和2 場主、渡英出発(駐英大使館付武官)。
- 7～10 小作から自作農へ。
 - 12 前田家、三菱鉦業kk農場内全鉦業関連土地売却
成立。

札幌の奥座敷、一世を風靡した光風館

稲穂 上仙 学 氏

1 光風館の概要

(1) 光風館の開業と景観

明治23年小樽区の東幸三郎が発寒官林字三樽別に鉱泉貸付の認可を得て温泉旅館として、手稲区富丘6条3丁目に「光風館」を開業する。

建物は竜宮城にたとえられるほど豪華絢爛の高級温泉料亭であつた。国道から石畳みの舗装道路が続き、春はその両側に桜並木、初夏はスズラン、秋は紅葉と四季折々の花に囲まれた行楽の場として賑わった。この頃定山溪も一軒中山旅館しかなく、札幌や小樽の人は軽川の「光風館」がいいと、随分客が多かつた、この賑わいは正しく札幌の奥座敷的存在であつた。会社で働く社員が春の観桜会や観楓会にとよく利用されていた。又スズランも大正時代には一面に咲いていたことから、一日数千人もの人が札幌からスズラン狩りにやって来た。この頃は札幌から臨時のスズラン列車まで出ていたほどである。以前は何十万坪の草原にスズランがびっしり咲き誇っていた。しかし、昭和の初め頃から定山溪等、近郊に温泉が発見され、浴客も少なくなり昭和16年頃から経営が思わしくなく閉鎖するに至った。その後昭和30年になって「手稲温泉」として復活している。



* 手稲温泉「北家」 小寺アキさんが温泉をやってみたく、光風館を譲り受け、昭和30年手稲温泉として経営した。昭和41年当時は「北家」として経営し、隣では山眺荘、ヘルスセンターが営業していたが、昭和50年に廃業している。平成6年は火災で焼失した。

2 手稲の最初の温泉宿

手稲で最初に出来た温泉宿は「藤酒舎鉱泉」であつた。村上藤吉は江州から親と共に小樽に移住する。商業を営んでいた父親が死んだ後経営がうまくいかず、息子の村上藤吉は豊平川上の温泉宿の湯番として仕事を始めた。その後、明治7年に軽川に「藤酒舎鉱泉」を始める。軽川に移住したのは明治5年頃であつたようだ。

3 光風館に関わつた出来事

(1) 高松宮妃殿下と光風館

昭和の初期高松宮妃殿下がまだ徳川喜久子姫(昭和5年に18歳で高松宮妃となる)が学生の時代、夏休みに光風館にて過ごされたことがある。このきっかけは、手稲の名士、近藤新太郎が以前八雲の徳川農場の支配人であつたことが関係している。

(2) 江連力一郎の尼港事件～海賊～軽川駅での逮捕まで

尼港事件 日本軍がシベリアに出兵しサハリン北部対岸ロシア、アムール川の河口近くの港ニコラエフスクを占領していた。しかし、大正9年2月バルチザン(ゲリラ)に包囲され降伏した。3月11日降伏協定を破って奇襲反撃に出た日本軍は破れ、隊長、領事らは全滅し、残兵と居留民122名は捕虜となつた。その後、日本援軍の来襲を知つたバルチザンは5月25日市中を焼き払い、日本人捕虜を虐殺し撤退した。水戸兵第2連隊の2個中隊も全滅し茨城出の江連力一郎は義憤し、復讐の念が高じその後、尼港方面の視察(大正9年)や事情研究を進めたりする。報復手段としてその1年後から沿海州でロシア人を甲板に並べて全員の首を切つた。そして船に積んである物をかっさらう海賊になつた。その首領が「江連力一郎」であつた。江連は早稲田大学出身で、剣道5段、柔道4段、空手3段など合計十数段あつた。江連の名前を聞くだけで世界の海運界では皆身震いしたと言われていた。

海賊稼業、江連力一郎は大輝丸という汽船をチャーターして、沿海州方面の海岸を襲い掠奪して暴れ回つた海賊であつた。しかし、略奪品の分配のことで仲間と折り合はず解散する。その後、稚内に船を乗り捨て逃亡する。警察は海賊として全国に指名手配して厳重に捜査したが、その行方は全く判らなかつた。当時新聞にも大々的に報道されていた。

あっちこっち逃げ回つた末、大正11年12月小樽から三樽別の「光風館」に愛人と愛人の兄、石川と言う人との3人で潜んでいた。ある時箕輪商店に元軽川駐在所の巡查で、この頃刑事をしていた人が来て、「今日捕り物があるから、若い者10人位手伝いに出してもらいたい」との申し出があり、至る所に張り込みをした。こうした状況の中、江連力一郎が逃亡のため軽川駅に来た所を逮捕された。

次回の予定

次回(11月12日)は、澤口由美子氏の講演「稲積農場のよもやま話」と永井道允氏の研究発表「大したもんだな北海道」を予定しております。会場は、視聴覚室です。

第101回(平成26年9月21日)定例会の講演要旨

『手稲の歴史を創った人達』

… 研究ノートから …

富丘 野村 武雄 氏

1、明治の村役場「ていね人」を、どうみたか？

明治44年5月前田農場へ皇太子行啓の4か月前、札幌支庁の求めにより〔手稲の人情風俗〕を手稲村役場は公印を押して回答した。「本村の地形は南は美しい手稲連山、東西北の平原は広々として雄大な美しい眺め。よって村民はまじめで思いやりの美風に富む。互いの交際、言葉、行いも良い。飾り気無いが温かく品が良い。地域別の細かな特色は上手稲は士族(伊達藩白石城下街)の子孫多く、自然に心身ともごつくて『一種狭気ノ存スル処アリ』。下手稲の軽川は交通の便良く何時も人の出入りが多い。そのためか世渡り上手、抜け目無い風に見える。その他は穏やかでまじめ、のんびりした村民」(『市町村資料(明治44年7月札幌支庁)3手稲村』)ここで「狭気」(おとこ気。強者を挫き弱者を助ける、おとこだて)との表現が見える。



2、手稲の157年を彩る人々 … 気になる、忘れられている人？の内から ……

手稲生まれで事情通、本町最後の町長養輪早三郎は軽川で「狭客と目される人は？」の問いに次の3人を挙げた。(小池嘉孝『秩父風』、間所正樹『手稲の郷土誌』より)

- ① 船木 與八 (旧軽川、本町。明治元→昭和7、64歳没。馬引き運搬業=駅通、旅館業、現手稲ステーションホテル。公立稀消防組組頭〔団長〕で活躍)
- ② 宮崎 宗右衛門 (稲穂、農業、地元開拓功労者の一人、独創的な家庭教育で手稲初の海軍大佐となった子息を育てる)
- ③ 村上 藤吉 (京都生まれ、明治5年頃軽川へ。天保12→大正5、75歳没。藤廼舎鉱泉業、後に藤の湯経営。明治20年代村総代に何度か選出される。明治28初の私設軽川消防組を創立、組頭となり有志30名を組織)

郷土史の労作『富丘今昔物語』の著者山本茂は開拓使が143年前、札・樽間交通の要〔通行屋〕= (駅通) を設けたサンタロベツ川辺に(明治・大正期)いた本間の事を「荒川さんの前に住み、駅通の様な事をしていた狭客肌の人で三樽別川の水で、馬を休ませたもの。～夫人には100歳近いころ金山で手稲温泉など富丘の昔話を聞いた。」この人にも「狭客」、「駅通」が出る …

- ④ 本間 徳太郎 (旧三樽別、富丘～金山。駅通業。息子徳一は庭師。明治34～44公立手稲消防組小頭〔副団長格〕で活躍)
- ⑤ 川上 作二 (前田5条10丁目、富山県出身の前田農場小作人。明治26→平成2、97歳没、手稲小卒。農場解放後モデル自営酪農業家。地域の長老・語り部)
- ⑥ 近藤 新太郎 (本町、慶応元→昭和13、74歳没、京都生まれ。北海道造林合資会社創立。手稲連山一帯で苗圃、植林、治山・治水・薪炭確保、自然保護。明治43軽川郵便局長初代手稲農会長、村議、学務委員などで活躍)
- ⑦ 千田 モト (本町千田小間物店生まれ、大正5→平成9、81歳没、手稲小卒。札幌舞踊会創立。「子供盆踊り唄」振り付け普及を睦 哲也と道内・全国に広める。道文化賞、市民芸術賞、文化庁地域文化賞。昭和5手稲初の飛行場、飛行士と結婚、満州で敗戦、札幌へ引き揚げの苦難にめげず多くの優れたバレリーナーを育成)
- ⑧ 小寺 アキ (明治初期に祖母軽川に入植、軽川～札幌～富丘。貧困と女性軽視の時代、小学校に入れず働きながら〔札幌遠友夜学校〕へ、文学者有島武郎に字を習い新渡戸稲造校長の指導を受け生涯の支えとする、遠友夜学校卒業生女性代表の一人。明治34→平成元、88歳没。中央区の割烹〔北家〕の経営者。故郷ていねの風光明媚に憧れ昭和30、ていね温泉「光風館」跡の富丘で「ていね温泉北家」設立。20年近く観光業に尽力)

手稲地域で公的に纏まった史書は手稲町誌(昭和26)手稲町誌(上下、昭和42)2種で手書きの手稲村史原稿(手稲郷土資料館保存)。手稲の自然は開拓初期はより厳しい。風雪、虫・水害、火災、治安、交通難(駄馬、人力が主)の克服に努めたが上記の船木、村上、本間らは消防・治安や駅通に一身を顧みず努力。役場も戸長私宅で消防・警察も無い時代。今回は比較的忘れられている村上、小寺に重点を置いて話した。「手稲郷土史年表(手稲郷土史研究会編)参照」

3、人生いろいろ、人は多面体 …… 郷土史は「ハテナ、サテナ」から始めたいもの。

(参考書名)市町村資料明治44、手稲村史原稿(手書き)、あゆみ〔手稲消防団の記録〕、遠友夜学校〔さっぽろ文庫〕、富丘今昔物語、手稲春秋「中央小100年記念誌」、手稲町誌上下、手稲の郷土誌

手稲郷土史研究会第100回定例会記念講演会アンケート集計結果まとめ

出席者200人に対して、上記アンケートを行った結果、45人の参加者から回答があった。回答率は22.5%となるが、各回答結果は以下の通り。

1. 参加者の概要

① 居住地状況

参加者の居住地状況では、ほとんどが「手稲区」参加(91.2%)となっている。地区別内訳では「前田」が4割、「富丘」が2割、「曙」が1割とそれぞれなっており、これら3地区で7割弱占めている。(表1参照)

② 性別

性別では男性が7割強、女性が3割弱となっている。

第2表

男性	33人	女性	12人
----	-----	----	-----

③ 年代

年代別では、「60代」がトップで4割強占め、次いで『70代』が3割強占めて、両世代で7割強占めている。

第3表

年代	回答数(割合)
30代	1人(2.2%)
50代	5人(11.1%)
60代	19人(42.2%)
70代	14人(31.1%)
80代	3人(6.7%)
不明	3人(6.7%)
計	45人

2. 100回記念講演会認識ルート

講演会の開催をどのようなルートで知ったかでは、「手稲郷土史研究会会員から」がトップで4割強占め、次いで「町内会の案内で」が2割弱となっており、研究会会員の案内、口コミが果たした役割が大きいことが伺える。

第4表

認識ルート	回答数(割合)
町内会案内	9人(19.1%)
地区センターの案内掲示とチラシ	4人(8.5%)
手稲駅のアイクル広場の掲示板	2人(4.3%)
手稲郷土史研究会会員からの案内	19人(40.4%)
その他	13人(27.7%)
計	47人(複数回答有)

3. 講演会の感想

講演会を聞いての感想では、「大変、良かった」が5割弱、「良かった」が4割強とそれぞれなっており、両者で9割強となり、好評だったことが伺える。

第5表

感想程度	回答数(割合)
大変、良かった	17人(48.6%)
良かった	15人(42.8%)
余り良くなかった	3人(8.6%)
全く良くなかった	0
計	35人

4. 今後の歴史講演会の開催希望

今後の歴史講演会の開催希望では、8割強が「希望する」と回答しており、ほとんどの人が今後も講演会の開催を望んでいることが伺える。

第6表

希望状況	回答数(割合)
希望する	32人(82.1%)
希望しない	2人(5.1%)
その他	5人(12.8%)
計	39人(複数回答)

※希望講演内容

「時代を区切っての手稲の歴史」、「石狩・手稲道道線」、「史跡・建物」、「手稲鉱山」、「手稲町の合併状況」、「手稲遺跡」、「飛行場・石油工場」

5. 手稲郷土史研究会の認知度

研究会の認知程度では、「知っていた」が7割強となっている。

第7表

認知度	回答数(割合)
知っていた	32人(72.7%)
知らなかった	12人(27.3%)
計	44人(複数回答)

6. 講演会感想・自由意見

・時間不足、・時間を短く・スライドの準備等あらかじめしておくべき・知らないことが勉強できた・VTR の録音悪し・レーザーポイントを使うべき・全般に面白くなかった・大変、良かった・手稲の歴史の一端を知りえた、また2, 3回の講演をして欲しい・せいぜい講演は2時間半に・映像の音声聞き取れず

7. 研究会に望むこと

・郷土資料館の早期建設を希望・資料館建設の具体的な方法・手稲記念館との整合性は？ 移設か不明確なので、はっきりして運動の展開を (集計・分析 村元)

～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・ ～ ・

＊＊ ご協力に感謝します ＊＊

今回の記念講演会に協力団体様から力強いご支援を頂きました。

- ・「手稲一万歩あるく会」(木村博会長)
- ・「幕末箱館歴史倶楽部」(近井健治主宰)
- ・「石狩市郷土研究会」(村山耀一会長)
- ・「北広島市中山久蔵を顕彰する会」(村井明観光ボランティアガイド)
- ・「新老人の会北海道支部」(民亮一副代表)
- ・「北海道文化財保護協会」(高久忠明事務局長)
- ・「手稲退職校長会」(菅原眞会長)
- ・「公立学校教職員互助会手稲支部」(野沢義郎支部長) など

ありがとうございました。

..... ◇ ◆ ◇ ◆ ◇

お知らせ (訃報)

去る9月26日『管野博子さん』(手稲温泉北家) 経営者が91歳で亡くなりました。

管野さんは、[ていね温泉北家] の創立経営者 [小寺アキ] さんの次女で、母の経営を助けられました (昭和30年創立から50年閉店)。

平成2年母亡き後、平成6年3月旧店舗不審火で焼失。その跡地にご夫君勉吉さんと住み守って来られました。(富丘6条3丁目)



平成19年9月本会員15名の訪問研修にご自宅広間で2時間、高齢に関わらず多くの質問に写真、資料も供覧し親切・明快に答えられ、その体験、記憶、視野の広さにびっくり。茶菓、果物の接待に恐縮。その後毎年小学生や本会員訪問や質問にも快く応じて下さいました。最近体調を崩され休んでおられました。学生時代のていね温泉 [光風館]、[手稲温泉「北家」] 経営・維持者母アキさんの事、経営経験、泉源、球徳稲荷大神社、富丘の今昔など最後の『生き残り語り部・証言者』が亡くなられ残念です。心から感謝申し上げご冥福を祈ります。

手郷研クイズ

次の事象は何年のできごとでしょうか？
下の数字をヒントにして教えてください。

1. 発寒村に入植した片倉家旧臣集住地を手稲村とする。
2. 手稲村に町制が施行された。
3. 手稲町と札幌市と合併した。
4. 札幌市が政令都市となる。
5. 西区から分区して手稲区誕生する。

【ヒント】1872、1881、1927、1935、1943、
1951、1966、1967、1972、1986

マッサンなど余市の史跡・名所を視察

～ 平成 26 年度手稲郷土史研究会バス視察研修ツアー報告 ～

薄曇りのまぎまぎの天気の中、総勢 34 人の会員等が参加して行う恒例のバス視察研修ツアーが 8 時半(10 月 2 日)にスタート。

今年は NHK の連続テレビ小説の「マッサン」放送も始まったということもあって余市の史跡名所を視察することになった。

興味深々の思いで視察した日本除雪機製作所の組み立て工場

その前に、会員の我々も意外と知らない手稲にある除雪機の製作で全国トップクラスの製造販売を行っている「日本除雪機製作所」を視察した。

稲穂にある同製作所の存在自体は知られているが、工場内を視察する機会がほとんどなかった故、会員一同興味深々の思いで説明を受けた。



会社概要を紹介するビデオを鑑賞した後、ロータリー除雪機の製造ラインを視察した。ラインでは、エンジン搭載、ボンネット組立、装置装着などの一連の作業が熟練従業員の手・操作でスムーズに行われていくのを目の当たりして、一同、感嘆の声を上げていた。

工場の敷地には、完成された様々なロータリー除雪機が陳列されており、係員から、それぞれの除雪機の特徴、機能などが紹介されたが、会員たちも間近で見るローリー除雪機に驚いたり、感心したりしていた。

興味関心を引き付けられたミニ北前船等の展示

余市に入り、最初の視察先は、会員たちもあまり行ったことない「よいち水産博物館」。

博物館前には、石川啄木が詠んだ歌碑とか、ニシン御殿等で使われた望楼などがあって、郷土史研究会メンバーたちも、こぞって見入っていた。

館内では係員が、それぞれのフロアにある目玉展示物を簡潔に紹介してくれて参加者一同、熱心に聞きかつ見入っていた。

特に 1 階の「海の道」コーナーに展示されていた北前船(弁財船)では、ミニではあったが、なかなか迫力もあり、会員の関心を集めていた。



道内唯一の運上屋に一同、びっくり

次の視察は、水産博物館のあるモイレ山の下にある「旧下ヨイチ運上屋」。

ここでは、係員から「当運上屋というのは、(請負)商人がアイヌ等を使役してサケ等を取引する商場であるとともに、松前藩士の政務を行う場でもあり、道内唯一の現存する運上屋だ」という説明を受けて、改めて一同びつくり。

この後、遠山金四郎の父君が巡視に来た時の様子を再現した部屋などを興味深く視察をした。



ニシン漁の状況を一目瞭然に判る展示物に見入った旧余市福原漁場

運上屋を後にして、次に向かったのは「旧余市福原漁場」。

やはりここでも係員からの説明を受けたが、秋田県からのヤン衆が春の3ヶ月間、板敷きの大広間に寝起きをしてニシン漁に精を出したことを偲んだ。



特にニシンが来たとき、土足のままで、飯を食べることができるように、広間の床板を外して飯台に替えれる仕組みを目の当たりにして、会員一同、改めて驚くとともに、その機能性にも関心を示していた。

その後、自由見学となり、什器類等の生活用具等を展示している4重扉のある文書庫(蔵)をはじめ、身欠きニシン、ニシン粕等の製品を保管した石倉、味噌、醤油等を保管した米味噌蔵、カズノコ、白子などを干した干場など、思い思いの関心ある施設等に行って視察を行った。

ニッカウキスキー北海道工場での視察後はほろ酔い加減(?!)

ホテル水明閣での昼食後、最後の視察先となったニッカウキスキー北海道工場。

先月末から同工場でウキスキーの製造に情熱を捧げ、遂にわが国初のウキスキーを作り上げた竹鶴政孝の生涯を描いた NHK の連続テレビ小説「マッサン」も始まったというだけあって、平日にも関わらず視察バスがズラリと並んでいた。お願いしていたガイド嬢もキャンセルされて、各自自由視察となった。

それぞれお気に入りの場所・施設に参加者たちは訪れるなど、思い思いに過ごしたが、最後に行き着くところはウキスキー等が試飲できる試飲会場と売店だったようだ。ほろ酔い加減で、売店で家族、友人たちにウキスキー類等を買って帰る姿が見られた。



以上、視察研修報告だが今回の研修先は、バラエティに富んだうえ、マッサン効果で注目を浴びる余市に焦点を絞って実施したのは、まさに時宜を得たものだったが、いずれの視察先も、もう少しじっくり視察できる時間的余裕があったら、なお良かったと思われる。

(村元 健治)